

を経験しながら実践力を鍛えます」と紹介しました。

グローバル人材の育成については、海外研修を担当する沖浦文彦教授が「コロナ禍によって、留学や海外インターンシップは実施困難な状況ですが、オンラインの海外ワークショップなどへの参加を促しています」と説明しました。

教務委員長の永江総宜教授は、2022年度から等々力キャンパスから、世田谷キャンパスの新棟に移転することを紹介した上で、「コロナ禍においても、心機一転、より充実したキャンパスライフが期待されます」と強調しました。

就職については、宇都正哲教授が「都市生活学部の主な就職先として、不動産関係、情報通信産業、卸売り、建設関係など多様な業種があります。1・2年次から3年夏までに



都市生活学部では、コロナ禍においても就職率が高いことや今後は大学院進学も有効な選択肢となることを説明。来年度のキャンパス移転の話では保護者も大きな関心を寄せていました。

計画的にキャリア形成を行うのが大事」と訴えました。

その後、希望する保護者のみの個人面談が行われ、担当する教員と熱心に話しをする保護者の姿が見られました。

今年度、全国の連絡会へのご参加は、全1,206世帯(1,279名)。コロナ禍においても多数ご参加いただき、ありがとうございました。

等々力キャンパスは私たちが取材しました！



環境経営システム学科3年
川村 颯太

久しぶりの取材。コロナ禍で学生生活や就職活動を不安視する保護者が多くおられ、そんな中、子どもを精一杯支援しようとする姿に感銘を受けました。

環境創生学科3年
藤田 潤

対面取材が初めてという後輩が多く、とても緊張したのだと思います。準備段階から取材当日まで、新聞会が一丸となって実りある取材ができたと思います。

参加された保護者の方々の感想



児童学科1年
星野 優海さんのお母さん

コロナ禍でも軽音楽部に入学し、オンラインの顔合わせなどの活動を行ったと聞いています。(娘は)弟の通っていた保育園の先生が都市大出身だったことから入学を決めました。

子どもが3年生なので、実習や就職活動で大変な時期を迎えています。コロナ禍で、周りのみなさんがどのように就職活動を進めているのかわからないので現状を確認してきました。

児童学科3年

これから先の授業や、TAPの状況について知りたいと思います。コロナ禍でのオンライン授業は仕方ありませんが、時が許せばキャンパスに積極的に迎え入れてほしいですね。

都市生活学科1年

等々力キャンパスは今年が最後ということで、ぜひ一度訪れてみたかった。説明会では、子どものこれからの生活や、就職について詳しくお話を伺い、とても有意義でした。

都市生活学科1年

子どもは一級建築士を目指し、大学院進学を目指しています。TAPの留学には参加できませんでしたが、説明会で国際育成について話しを聞くことができよかったです。

都市生活学科2年

毎年参加しています。今年はとくに長引くコロナ禍で子どもの就職活動がどのような影響を受けているのを知りたくてきました。学生も先生も大変ですが、がんばってほしいですね。

児童学科3年

人と直接会うことがさまざまな学びにつながると思うので、とにかく大学に通わせたいと思っています。先生方の最先端の研究にも、しっかり向き合っていきたいですね。

都市生活学科1年

取材にご協力いただきありがとうございました。

郡山会場

求められる「コロナ禍での学びの保障と各種支援」

横浜キャンパス キャリア支援センター係長 北村 慶太郎

昭和42年の開催から数えて今年で55回目を迎えた「大学と保護者との連絡会」。今年度は全国20会場で開催いたしました。今回は「郡山会場」からご報告いたします。

「郡山会場」は、9月4日(土) 13時30分より「郡山ビューホテル」を会場に開催し、11世帯11名の保護者の方にご参加いただきました。

大学からは教職員4名が現地に出向き、当日配布した冊子とパワーポイントによるスライドを用いて、ご説明申し上げました。「大学の近況」では、2023年竣工予定の世田谷キャンパスリニューアル計画やコロナに関する各種対応、「学修の流れ」では、4年間の学修の流れや成績通知書の見方、「キャンパスライフ」では学生生活の支援体制、「就職・大学院進学」では就職支援体制と各種支

援、大学院進学のメリットについて説明をさせていただき、大学の「いま」について理解を深めていただけたかと思えます。また、本学同窓会組織の校友会福島支部からも、支部活動や県内就職状況について情報提供いただき、大変有益な機会になったかと思えます。全体説明後の質疑応答や個別相談では、「コロナ禍でフィールドワーク等の体験機会が失われたが、代替プログラムはあるのか」「コロナ禍における就職実績や支援、今後の見通しはどうか」といったコロナ禍での学びの保障と各種支援に対する大学への期待の大きさをひしひしと感じ、責任を感じると共に、その期待に応えられるよう、今後の大学の発展に貢献したいと、決意を新たにいたしました。

